

大宮家文書中の依水園関係史料

はじめに 奈文研では奈良市と連携研究の協定を結び、奈良市氷室神社宮司の大宮守人氏が所蔵する、大宮家文書の調査を実施してきた。今回、その中に依水園関係の史料を見出した。明治時代の依水園の性格を考える好史料なので、ここに紹介する。

体裁 外題・内題に「依水園」と題した、能の謡本である。縦24.9cm、横16.6cm。袋綴装の冊子本2冊を紙綴で仮綴じしている。2冊とも共紙表紙をつけ、各13紙（共紙表紙共）、合計26紙である。2冊の本文は同文だが、朱書訂正は前冊に多く後冊には少ない。そこで前冊のみを右頁に翻刻した。ただしゴマ点は翻刻を省略した。朱書訂正の文字は、該当部分に傍線を付し、脚註に「」でくくって朱書を記した。ただし短文の朱書は「」で本文中に示した場合がある。朱書ミセケチは本文左側に「ミ」を付した。なお、本文の墨書には濁点は存在せず、朱書で追記したものである。翻刻では、仮名の濁点は表現したが漢字の濁点は省略した。また欄外の墨書注記等は脚註に記した。

奥書は前冊・後冊のそれぞれに存在する。前冊の奥書は右頁に翻刻した。後冊の奥書は下記に掲げる。

明治三十七年五月 奈良氷室社神官 大宮守慶述
同年七月 ■■■更正ス 平松甚平時範書
并節句拍子ヲ付ス

これらの奥書より、この謡本は明治37年（1904）に大宮守慶が創作し平松甚平が節句拍子を付け、大宮守長が朱書で校正したものであることが判明する。

内容 都で主君に使える臣下が、名所古蹟の風景を主君に伝えるために南都を訪れ、吉城川に至った。そこで会った老人に尋ねたところ、依水園に案内された。そこには調布を晒している者がおり、彼から、若草山・御蓋山・東大寺の眺めや、吉城川の流れに晒す奈良晒、手向山の紅葉、雲井坂、南円堂の鐘などの名所を教示される。そして最前の老人は、氷室明神が現れた姿だった。

この話は、吉城寺（奈良阪町の善城寺カ）が「一新のころ」に廃寺になった・「大臣のはるばる東より御下向」とある点より、明治時代の情景を語っているのだろう。

背景 『奈良坊目拙解』卷14によれば、吉城川における奈良晒は延宝年間（1673-81）に木戸氏が始ま、晒屋

「三心モ失（ウツケ）」（62）「カネテ」（63）「子細」（64）「先ツカ」（65）挿入「其名ニ背（ソム）カヌ」（66）「頂（イタダキ）」（67）「サテハ畠火耳無天ノ香久山」（68）「カケテ木津川ノ流（マテ）」（69）「ニテ神佐備立錐杉二月懸（カコノル夜唐（モロコシ）明州（スウジウ）ノ秋ヨ思ヒヤラレ」（70）「魏（ギ）タタル」（71）「」（72）「散シク花の下蕨（シタフラビ）。折モタガズ。吾妹（ワキモ）子」（73）「晒ス調布（ハ）」（74）「其名ノミカハ」（75）「モ」（76）「カザス」（77）「ハ」（78）「ニコガル」（79）「モトバロ」（80）「三邂逅（スクリアヒ）」（81）「ハシ。共々」（82）「景色ヲ」（83）「間ニ急カノ」（84）「え」（85）「カ」（86）「の昔ヨリ此ノ處ニマシテ」（87）「」（88）「現形（ゲギヤウ）シタマヒケルニヤ」（89）「ナホモ」傍書「アヅマ」（90）「感セ」（91）「コソト」（92）「アラアリカタヤ」（93）「のつとハ」（94）「弥ましにタヽエツクシテ。カタルヘ」（95）頭注墨書「後シテ」（着付厚板／面大飛手／赤頭法被／半切扇／奈良晒／台ニ乗セ持ツ出ルカ／或ハ肩ニ掛出ルカ」（96）「つニカツゲン」（97）「ぞ名ニ負フ調布」（98）「き」（99）「水ヲ幸（イ）ヒノ神ナレバ晒ス調布ノ末カケテ幾代ツキセズ守ルベシ」（100）「語（ゴト）」（101）「内外（ウチトノ）」（102）「ニマツル神ミソヲ」（103）「ツカヘマツルノオホセゴトアラ荒妙（ハ）調力ナ君ノミ為ト。機人（ハタビト）ノ齊ヒテ織レル。夏引ノ手引ノ糸ハ末マデモレヌ御代ノタメシナリ」（104）「ハ」（105）「ニチキリツ、ナホ」（106）「」（コ）ケムリ霞ト共ニ失ニケリ」草モ木モ／華（ハナ）咲く春ト。打

の門内の東南の吉城川沿いに、延宝天和年間（1673-84）に清須美氏が三秀亭という山荘を建てたが、その庭前は「佳美絶景」だったという。この三秀亭は現在の依水園の前園となっている（『名勝依水園修復整備事業報告書』名勝依水園・寧楽美術館、2017）。

その東方には東大寺の西塔門跡があった（『東大寺寺中寺外惣絵図』『奈良六天寺大觀』第9巻東大寺1、岩波書店、1970）。江戸時代には門跡に大きな伽藍石が残っており、その付近は享保3年（1718）以降は晒屋が土地を借りている（新修東大寺文書聖教第5函1括37号・52号。また17函2括46号・65号など。『東大寺所蔵聖教文書の調査研究』2005参照）。門跡は現在の依水園清秀庵北側の、依水園の土地が北に張り出した場所である。以外も含め、江戸時代末には晒屋による東大寺からの借地は4700坪余にも上っていた（同第17函2括78号・99号）。明治17年の『大和名勝豪商案内記』（奈良県立図書情報館が複製本を所蔵）にも、水門村で吉城川沿いに奈良晒業を営む絵が載っている。

その土地の主要部分は明治33年に関藤次郎の手に渡り、依水園と名付けて前園の東側に後園を造営していく。しかし明治37年生まれの藤井辰三の回想でも、留守番が「晒工場を営み、子供の頃遊びに行くと、カルキの臭がブンとして、若い職人さんが、エイホエイホと布地を搗いていた」という（藤井辰三『ふるさとの想い出 写真集明治大正昭和 奈良』国書刊行会、1979）。依水園となった後も、奈良晒生産は続いていた。

小結 依水園は水に恵まれ景色も良い名勝地である。明治時代にはそれに加えて、東大寺の近傍で奈良晒を晒している様子や傍らの氷室神社も、その構成要素だったことがうかがえる。近世から近代にかけての、奈良の歴史・産業を体现した景観が偲ばれる。（吉川 聰）

依水園

(¹ワキ二人 次第古蹟たづねる旅なれや。/²ハル。春日のはらにいたり舞(ワキ)地返シワキ詞是は当今に仕へ奉る臣下也。扱も吾君は。日ごろ山水を好み給へども。冠帶の御身なれば。たやすく御遊覧したまふ事かなはせば。汝今より南都に趣き。その風景を写させ。居ながら賞覽し給ふと御ことにて候間。只今南都に趣き候。打切道行上八重霞。春日野辺をうがち来て。打切尾花がもとのおもひ草。おもひこがれし飛火野の。打切野守が岡を過行。吉城川にもしつきにけり。/³ワキ急候程にははや。吉城川に着て候。先此所にてやすらひ。所の人を相まち清き流を尋ねふするにて候。/⁴セイ打切淋しきさは心にかなふ山里の。尽せぬ御代は久かたの。月日の石の有世成らん。打切ヤ上打世の中のうき事しらぬはなれや。/⁵打切何を松風水の瀬に。晒す調布のますら男が。声こそ霞め山彦の。打切御笠にもれし白雪と。実白妙の栖家かな。/⁶ワキいかに是成人に尋申べき事の候。シテへこなたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキははよ都の者にて候が。君よりの仰受⁷名所古蹟を尋んとてまかりまうで候が。此水上はいかなる所と申候ぞ。シテへさん候是は万葉集の歌に。吉城川水せきあげてすましつゝ。野田の早苗を今かとるらんと出したり。そも水谷川の上にて候。ワキ上⁸拵吉城⁹川とはいかかる謂れに候ぞ。シテへさればの事。昔開化天皇御即位のありしき。身を潔¹⁰給ひし所を高橋川と名に。伝へ申候。ワキその高橋川を吉城川と名付しは。いか成謂成やらん。/¹¹シテへ是はむかし大慈院の北方に。吉城寺と申寺あり。上その名残を川の名に。ワキその古寺ハシテへ青丹よし¹²下奈良坂の境内に。うつされしが。一新的ころにあわれ立消て。今は其かけだにもなし。和同上その川添の寺跡ハ。打切。/¹³山水風流の庭園となりて。ア依水園と語るべし。我¹⁴道しるべ申さんと。先達¹⁵。ロ¹⁶。こなたへと入りに¹⁷けり。こなたへと共にいりにける。打切あら嬉しやなさらバとて。心の外のこの詠め。汝が恩のあつきこと。都に帰りいつまでも。名をおもひ出に聞まほし。ヤア¹⁸思ひきや。朝な夕なの木の間より。露¹⁹も波らさぬ都人に。問はる縁とハ。いとはづかしの御事や。同ヤアへ一樹の陰。一夜の

月のやどるとも。名さへ知らずやみぬべき。今ハ何をか²⁰下²¹つか²²むべき。シテへ心してこそ問はるをヤツハ答え²³。ハル²⁴らんも本意なれど。たとへ誠を語るとも。などかは信じ給ふべし。かき消す様に失にけり。/²⁵中入

間狂へ是ハ此辺りに住居致者にて候。いつものごとく調布に従事せばやと存候。いやあれに見なれ申さぬ。貴き御方の御入候。何れより御入にて御座候ぞ。ワキはは都の臣下也。君の仰を請給²⁶此所にまふで候。是ハとなく庭前²⁷の詠なつかし²⁸思ひ。今に立去らす候。/²⁹所の人にて候ハマ近寄て此所の謂委敷御物語候へ狂言³⁰は思ひも寄ぬ仰にて候。我等も委敷ハ存ぜず候得共。凡承り及たる通り³¹申上ふするにて候。御覽の如くあ³²れなるハ³³若艸山と申して。峰³⁴よりハ奈良洛中洛外目の下に見³⁵へて候。又近国の山と木津川の流かけて³⁶取るが如く見渡され候。また是成ハ御笠山と申。大樹の繁茂し別けて大寺と申。聖武天皇の勅願に御はします大仏殿にて候。則四季の詠ハ殊更なり。名所の多きことはかぞり³⁷るにとまなし。先づ春日野の若菜萌の飛火野の。若艸山の山焼にこがれしあとの早蕨を。摘人多き早乙女³⁸が。野田の早苗をとりわけて。水もゆたかに吉城川。流に晒す³⁹奈良晒。名こそ高けれ⁴⁰月雪の。花もみかさの山陰に。秋は⁴¹紅葉の。手向山。色もふかみて⁴²小男鹿の。声聞ごと⁴³にとどろきの。橋よりつゞく雲井坂。時雨にぬるゝぬれがらす。夕つけ渡南円堂の鐘。ヤアよしなき長物語に時をうつして候。まづ我等が聞及たるハかくの⁴⁴とくにて候。ワキへ委敷承り候物かな。最前老人の老人來り⁴⁵此依水園にともなひ来り⁴⁶。庭園の風景ゆる⁴⁷。詠め候由を申あの森の陰に立寄ると見⁴⁸て見失ひて候。狂言⁴⁹へこれはふしぎなる事承り候物かな。あ⁵⁰の森ハ水室の明神と申て。古ヘ奈良の都より今に至るまで⁵¹。国土を守護し給ふ靈神にて候。大臣⁵²のはる⁵³東⁵⁴より御下向候ひけるにより御道し⁵⁵るべ申さん為に仮に顕れ給ひける⁵⁶と存候。暫⁵⁷此所に御逗留なりてかさねて靈夢を御待⁵⁸あれかしと存候。ワキへ我等も左様に⁵⁹存候。狂言⁶⁰へかさねて御用も候ハ⁶¹仰られ候へ⁶²ワキへ頼み候べし。狂言⁶³へ心得申て候。

かへる⁶⁴言の葉のよせくる水の清ければ。重て爰に来るべし。/⁶⁵早苗シテ上⁶⁶へあらはづかしや我姿。打込⁶⁷。都の園を守護し。その園主の幾世つきせず名を残す⁶⁸。あら有難の神風⁶⁹や打込⁷⁰伊勢におわせし⁷¹大御神。/⁷²ヤツ⁷³へ一拍子⁷⁴へ卯月のころのころもが⁷⁵ヤツ同下⁷⁶へ花の香りハおしめども同神代ながらの道すぐ⁷⁷にヤツ都の春も過ぬれば⁷⁸雲井はるかにおわします。一天万上の大君に。貢奉らんむかしより⁷⁹。卯月とともにかわ⁸⁰らじと。庭の真砂子の尽せぬ御代は。君⁸¹万歳と祈るなる。勅使ハ都に帰へり給へバ。あらなつかしの面陰や。あら名残惜面かげと。氷室の森にぞ入りにける⁸²。

明治三十七年五月

奈良氷室社神官大宮守慶述

此書平松氏ヨリ送り来る

平松甚平節句拍子

朱書平松氏正ス

註 ※傍書は()内に示した。

(1) 端上墨書「ワキ狩衣風折鳥帽子大口扇妻紅ヒ白骨/ワキツレ素袍太刀持扇子」 (2) 「コキニシ跡ヲ尋ネムト・マドヒアルキ(ユミテ・ハルバルト)」 (3) 「日ゴロ、吾君」 (4) 「ウタテ」 (5) 「ズ」 (6) 「サレバ所々ヲ尋ネ」 (7) 「ゾ」 (8) 「サレバ所々ヲ尋ネ」 (9) 「シ」 (10) 「セバヤト」 (11) 「捷(ジヤウ)」 (12) 「ハルバル」 (13) 「ハ¹⁴遣(サレ)候者也」 (14) 「打¹⁵スギ」 (15) 「原ニ」 (16) 「シバシ松蔭」 (17) 「名タル景(ケンキ)」 (18) 「源ラクマナフ」 (19) 「頭注墨書「シテ面三光尉/無地熨斗目/茶水衣/腰帶/扇墨画」 (20) 「サトナレハ」 (21) 「ヌナガメヲ」 (22) 「三契リツ」 (23) 「結ベル宿ハ吳竹ノ世ノウキフシヲヨソニシテ」 (24) 「サスヤアミ戸の奥深ク何ヲ松風川隈カハクマニサラス調布ハ春日野ノ日影ニモレシ白雪トウタガフ宿のナカメアリ」 (25) 「ヤム事ナキ」 (26) 「承リ」 (27) 「未ニテ又高橋川ト申伝²⁸候」 (28) 「高橋」 (29) 「御時九五の御」 (30) 「キヨメ」 (31) 「川原ナリシニヤ。今モ高橋川ト申」 (32) 「あなたふと、ものより」となる流とハ、ものよりとなる、なれど」 (33) 「今モ川原ノ禊(ミソキ)を高橋ノ禊ト申候ハズヤ、昔コノ川添」 (34) 「川ニ因(チナ)メル名トゾキク」 (35) 「押紙頭注墨書「ナシ得ベクバ/青丹よし」ノ四字/刪(フタシ)」 (36) 「御社近ク」 (37) 「セ」 (38) 「コノ手柏ノフタ・ビハ見ルカゲモナクタエントゾク」 (39) 「別業(ツキヤウ)」 (40) 「挿入滝落(タキオト)シ水走ミツハシラセタレハ」 (41) 「語るナルイザ」 (42) 「マツ」 (43) 「招ジ」 (44) 「リ」 (45) 「插入サハ」 (46) 「宿ト聞ニシヲ都ノ人ニ口(クチ)会(アヘ)テ其名をサヘニ間ハルトハ」 (47) 「其名」 (48) 「ズテ」 (49) 「何ヲムナシク」 (50) 「アリテ」 (51) 「モノヲ本意ナゲニ名乗ラ」 (52) 「アヂキナヤ」 (53) 「き」 (54) 「オホセノ」 (55) 「サラサ」 (56) 「ラセ」 (57) 「サルベキ方の」 (58) 「承ハ」 (59) 「テ。ハルハル下リ候ガ」 (60) 「園」 (61)